

～観光からまちづくりへ～

全国市長会は6月4日、全国都市会館において「市長フォーラム2013 ～観光からまちづくりへ～」を開催しました。

フォーラムでは、全国市長会会長の森・長岡市長が開会あいさつを行った後、「観光からまちづくりへ」と題して、九州旅客鉄道株式会社 代表取締役社長の唐池恒二氏による講演が行われました。唐池氏はJR九州の「D&S列車」などの事業概要を交えながら、都市の魅力の要素やまちづくりのポイントなどを説明。市長をはじめとした約680名の参加者が耳を傾けました。

さらに、講演の後には、出席市長との活発な意見交換も行われました。

ここでは、その講演の様様をお届けします。



観光からまちづくりへ

九州旅客鉄道株式会社代表取締役社長 唐池恒二からいけこうじ

都市の魅力の3要素とは

実は、私は「観光」という言葉はあまり好きではありません。歴史をひもとくと、中国の古典「易経」の「国の光を観る」に語源があるようですが、日常的に語られる観光という言葉はどうも薄っぺらい感じがします。事実、キャンペーンやイベントなど、「人集め」の意味合いが強いですからね。

私はそのような一過性の方策よりも、もっとどっしりと腰を落着けた取り組み、つまりまちづくりこそが、地域の魅力を向上させる上で重要ではないかと思っています。そこで、本日は私もJR九州の取り組みも含めて、「観光からまちづくりへ」をテーマにお話ししたいと思います。

まちづくりについて考える際に、常に私が参考しているのは、東京大学名誉教授の故・木村尚三郎先生の言葉です。木村先生は西洋史学

者でありながら、日本のまちづくりにも造詣が深く、多くの自治体のアドバイザーも務められたと伺っております。その木村先生は都市の魅力の要素として、次の3点を掲げられました。

1点目は「安全・安心」です。防災対策が行き届いていない、治安が悪い。こんな都市を訪れたいという人はまずいないでしょう。皆さん方も日々この「安全・安心」の実現を目標に、行政の指揮をとられていると思いますが、これはまちづくりの根幹と聞いていいでしょう。

2点目は「歩く楽しさ」です。京都の町並みはその典型です。細い路地を曲がるたびに、新しい景色が、人の姿が目飛び込んでくる。京都に限らず、鎌倉や奈良といった魅力的なまちには必ず歩く楽しさがあります。

九州でもこの「歩く楽しさ」に着目して、活気を取り戻した都市があります。温泉都市として名高い、別府市です。実は、この別府市は10年程前までは交流人口の減少に悩まされていま

た。なぜかというところ、まちに歩く楽しさがなかったからです。大型宿泊施設でお客様を囲い込み、施設内であらゆるサービスを提供する。お客様にとっては便利である一方、外に出る機会がないものだから、別府市ならではの風景も人の笑顔も記憶に残らない。そして、まちのお店も廃れていく。そういう施設だけのお客様を長いこと惹きとめるのは無理なことだったのです。

今や別府市はその反省に立って、地域全体でお客様をおもてなしするまちへと大きく変わりました。ボランティアガイドの案内のもと、まちの中に点在する温泉めぐりを楽しむ。歩く楽しさを取り戻し、楽しいまち、元気なまちに変わっていったと思っています。

3点目が「食とお土産」です。実際、外国人観光客が日本を訪れる目的を調査すると、1位が「食」で2位が「ショッピング」なわけで、木村先生は早くからこのことを看破されてい

たわけです。

JR九州が誇る「D&S列車」とは

鉄道とはA地点からB地点までの移動手段、交通手段に過ぎないというのが一般的な感覚だと思います。しかし、私たちJR九州ではその概念を大きく変えたいと考えています。つまり、乗ること自体が楽しみであり、目的でもありません。そうお客さまに感じていただく列車をつくることに力を入れているのです。さらに、そこから波及して単にお客さまをお運びするだけではなく、各地のまちづくりによい影響を及ぼしたいとも考えています。

そうした観点から製作した列車が、九州各地

の代表的な行楽地に向かう、まさに旅行を目的とした「D&S列車」(旧名称は「観光列車」)です。Dはデザイン、Sはストーリー。「デザインと物語(ストーリー)のある列車」と名付けました。デザインはすべてデザイナーの水戸岡鋭治さんの手によるもので、本当になかなかのデザインです。

そして、それぞれの列車にストーリーがあります。例えば、漆黒のボディが印象的な「はやとの風」。これは戦国時代の島津義弘公の軍勢が身にまとった黒色の鎧、甲冑をイメージした列車です。時は今から400年以上前の、1600年。関ヶ原の戦いで西軍の陣が乱れて、敗色濃厚となっても、敵に背後を見せることなく、家康軍の真ん中を突っ切って戰場から退いた、勇猛果敢な薩摩隼人。その1000人の島津藩が鎧よろい兜かぶとで疾走する様が「はやとの風」の心なんです。

「指宿のたまて箱」は薩摩半島に伝わる童宮伝説をテーマにした列車なのですが、鹿児島の大な錦江湾とその先の桜島が見える側を白、開聞岳の山側を黒に塗装しました。黒髪の青年だった浦島太郎がたまて箱を開けた瞬間に煙を浴びて、白髪の老人になったという設定だけではありませんが、その腹案を水戸岡さんにお伝えしたところ、

「私は遊びで仕事をしているんじゃないですよ」とたしなめられました。水戸岡さんもプロのデザイナーですから、当初はさすがに抵抗があったようです。ただ一旦手掛けられると、次第に気持ちが出てきたようで「唐池さん、たまたま箱に見立ててドアの上から白い煙を出しましょう」と、ミストが出る仕掛けまでつくりました。これは、お客さまに大好評です。

九州新幹線が開業してからというもの、関西や、岡山・広島地区から多くのお客さまにお越しいただいています。特に関西や広島のお客さまは「この演出に大喜び。皆さん一様にミストが噴き出す瞬間をデジカメやケータイ電話のカメラで撮影しています。そんなに写真を撮って何に使うのかってこちらが疑問に思うくらい、喜ばれていますね。また、指宿市ではお祭りとなれば、「指宿のたまて箱」のおみこしが出る。さらに、旅館、ホテルなどのおかみさんが集まって、たまて箱にちなんだメニューを考案する。また、指宿の市役所が駅の手前の線路沿いにありますが、市役所の職員が仕事をほうりだして手を振ってくれる。これはありがたいです。列車が移動手段から観光資源になって、観光資源からまちづくりの核になっていきます。

列車が地域資源として、各地のまちづくりに貢献

単にちっぽけな列車が、地域の中では観光資源になっていき、そのまちづくりの核になっていく。これこそ、物語(ストーリー)だなと思っ





ります。家を建て替える際には、旧城下町の町並みのイメージを壊さないようにする。できれば、木造にする。建て替えに当たっては、道に面した面は1m後退させ、その分、道を通る人のために、軒ひさしをつける。看板もけばけばしいものではなく、できれば、文字は筆で書く。こうした申し合わせを住民の皆さんの間で取り交わしたのは既に30年以上も前のことのように思います。さらに、条例でもないのに、皆さん律儀に守ります。まちに対する誇りや愛着心が強いのはもちろんのこと、共同体意識も強いという

ております。ジャズのスタンダードナンバーをそのまま列車名にした「A列車で行こう」、Aは天草のことで、三角駅でつながる高速船で天草まで乗り継いで行けます。その高速船のお客さまが増加するに伴い、天草市では本年をおもてなし元年に位置付けて、地域全体でお客さまをお迎えする態勢を整えられてお聞きしています。さらに、天草出身でニューヨークで活躍されているジャズピアニストを招き、ジャズのフェスティバルを開く計画もあるようです。このようにJR九州では、「D&S列車」を中心に、乗ること自体が目的となるような、楽しい列車を走らせ、まちづくりに貢献してきたいが、その集大成が豪華寝台列車クルーズトレイン「ななつ星 in 九州」です。

に、乗ること自体が目的となるような、楽しい列車を走らせ、まちづくりに貢献してきたいが、その集大成が豪華寝台列車クルーズトレイン「ななつ星 in 九州」です。

訪問するたびに 進化する旧城下町

冒頭で木村先生が掲げた、都市の魅力を形成する3要素をご紹介しましたが、これにプラスして、私なりにまちづくりのポイントを整理してみました。

1つ目は地域の「共同体意識(結)」です。この意識が最も高いのは、世界遺産にも登録された「白川郷・五箇山の合掌造り集落」でしょう。合掌造りは約40年に1度、屋根の葺き替えを行う必要があるのですが、この集落では今でも住民総出で行います。男衆が屋根の上で葺き替え作業を行い、女性陣が炊き出しなどのお仕事をされる。このように、地域で助け合い、支え合う組織としての「結」が息づいているのです。

九州でもこの共同体意識が高い地域があります。D&S列車の「海幸山幸」の停車駅でもある

でしよう。だからこそ、家の建て替えや、看板が掛け直しの際には、それらがより古い町並みにマッチするように、地域に溶け込むように工夫するわけです。これが飴肥のまちづくりの優れた点ですね。

物語がなければ、自らつくればいい

2つ目は「おもてなしの心と表現」です。先ほど紹介した指宿市もおもてなしの意識が高い地域です。何しろ、沿線の高校や市役所では、「指宿のたまたま箱」が通る時間帯に合わせて、何十人もの人が窓から身を乗り出し、手を振って、お客さまを歓迎します。毎日ですよ。お客さまにとつてこれほど感動的なおもてなしはないですよ。ね。どんな美しい風景よりも感動した」とお話しになるお客さまも少なくありません。

明治の偉大な外交官、小村寿太郎の出身地の飴肥もそうです。電柱、電線の地中化はハード面でもおこなわれていますが、ソフト面のおもてなしも行き届いています。幼稚園の園児であつても、必ず「こんにちは、ありがとうございます」と挨拶してくれます。子どもだけではありません。女子高生に出会っても、にこっと笑って、「こんにちは」と言葉を交わしてくれる。

3つ目がデザインと物語(D&S)です。デザインというといささか大仰な感じがするかもしれませんが、基本は整理、整頓、清掃です。ごみを拾う、不要なものを取り除く。順序良く並



「飴肥(日南市)という旧城下町です。私はこの「飴肥」こそ日本一のまちづくりが行われている地域だと確信しています。

全国に武家屋敷が立ち並ぶ城下町は少なからずありますが、飴肥には電線も電柱もありません。既に30数年前にいち早く地中化しているのです。訪れると、「電線のない風景はこんなに美しいのか」と驚くことと思います。

さらに、この飴肥が素晴らしいのは、訪れるたびに、古い町並みが成長し続けている点です。その秘訣は、町内会の申し合わせ事項にあ

べる。整理、整頓、清掃をするだけでもまちは変わるんだと思います。

そして、ストーリーですね。先ほどのD&S列車ではありませんが、そこにしかない物語やドラマをまず大切にすること。もし、物語がなければつくればいい。自らつくって、それを広くアピールすることで、地域はより発展するのです。

地域の祭りはその格好の機会になると思います。長崎の「長崎ランタンフェスティバル」も、20年前前、観客は数万人レベルの小規模な祭りでしたが、今や100万人もの人々が訪れる一大イベントに成長しました。長崎市全体でこのイベントを育ててきた結果です。

札幌市のYOSAKOIソーラン祭りも同様です。第1回が行われた1992年当時、観客動員数は20万人でしたが、現在は200万人以上。さつぽろ雪まつりと並ぶ札幌の大規模イベントにまで発展しました。何も歴史や伝統だけが、祭りに求められる要素ではありません。

木村先生は、「住んでよし、訪れてよし」がまちづくりの基本だともおっしゃられました。訪れる人が楽しいだけでなく、住民にとつても楽しいまち。そうしたまちをつくれれば、交流人口の増加にとどまらず、定住人口の拡大にもつながるはずです。皆さま方にはぜひそれを目指して、まちづくりに取り組んでいただきたい。私もJR九州も、まちづくりを担う会社として、そのお手伝いができればと考えています。本日はご清聴、ありがとうございます。